
意味のないことを

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意味のないことを

【Nコード】

N4112R

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

意味のないことをしてみよう。そう思ったわけではないが明日香は意味のないことをしてみました。意味だらけの生活に飽きて。

CAUSE

明日香は自分の人差し指に三本の線が入っていることに気づいて立ち止まった。目の前の信号は青なのに、突然立ち止まった明日香を通りすがりのサラリーマンは胡散臭そうに見た。しかし明日香はそのことには気がつかない。

どこかで切ったのだろう。血こそ出てないが三本の内一本、パツクリと割れたその線は鈍く痛んだ。

かぜいたち……違うな。カマイタチだ。

明日香は冬の冷たい風に乗り、鎌を手にブンブンと振り回すイタチを想像した。しかし脳裏に浮かんだのは、西遊記の孫悟空がキントウンに乗り、如意棒を振り回す様子だった。

信号が赤になり、自分が渡り損ねたことを明日香は知った。このままもう一度信号が青になるのを待つのは何か釈然としない。明日香はそう思い、意味もなく右の方へ渡ってみた。このまま進んでも工場地帯、そのあとは団地が広がるだけだ。ま・いいか。と明日香は特に考えることなく、歩を進めた。

コンビニを通り過ぎ、工場に差し掛かったとき、明日香は妖精のことを考えていた。工場の大きな門の看板に、妖精の絵が描かれていたからかもしれない。髪の毛が知らない間に結ばれているときがある。それは寝ている間に妖精がイタズラして結んでいるからなんだって。明日香がそう言った日から、友人は明日香のことを「不思議ちゃん」と呼ぶようになった。

明日香は子供のころ、本気でカマイタチや妖精のことを信じていた。サンタクロースだって幽霊だって、いると確信していた。当たり前のように。何故なら大人が言うからだ。

「いい子にすればサンタさんくるよ」

「悪い子は妖精に連れ去られちゃうよ」

明日香はその言葉を疑ったことは一度もなかった。中学生になった今だって、人に見えないものは必ず存在していると思っている。

小学生の頃仲の良かった友達が住んでいた団地、に行く道。大きな工場の前の道を明日香はそう認識している。歩いて通るのは初めてかもしれない。

自分がどこを目指しているのか決めないまま、明日香はずんずんと歩いた。教科書が沢山入ったりリュックは歩きたびに重くなつたが、明日香はあて先の無い旅にときめいていて、帰ろうとは思わなかった。

歩道の端に10円玉が落ちていた。明日香は嬉しくなつて、拾つた10円玉を太陽にかざしてみる。何かの暗号が隠されているかもしれない。明日香は10円玉の隅々を凝視した。もちろん10円玉が透けるようなことはなく、ただの古びた10円玉だった。明日香はそれでも落胆しなかった。

10円玉を拾うだけで、こんなにも幸福になれるのか。明日香は新しい発見に心躍らせた。そして、こんなに嬉しいことならば、この幸福を他の人にも回すべきだ。と思いつき、10円玉をそつと地面に投げた。

コロコロと転がつて、10円玉は歩道脇の樹木が植えてある土の上に落ち着いた。それを見届けてから、明日香はまた歩き始めた。

小学生の頃仲が良かった友達が住んでいた団地、に着いた。その友達は中学に上がる前に引っ越して、もうこの団地には住んでない。同じ形の建物がずらりと並ぶ光景はずつと変わらないが、明日香は団地が随分小さくなつたように感じた。思えばあの子が引っ越してから、ここに来たのは初めてだ。あの猫はまだ生きているだろうか。エサをやって、知らないオバサンに二人で怒られたことを懐かしく

思い出した。

団地の前に膝丈ほどの雑草が広がる場所がある。そこでよく野良猫をエサで集めて怒られた。明日香は雑草で罾を作ろうと思いついた。よくマンガで見る、足を引く掛ける奴だ。明日香は1組だけ草を結んだ。誰かが転んで怪我をするといけないから、回りの石や誰かが置いていったバケツなどのゴミをどかした。

でもこんなところ、人はめったに入らないんだよね。明日香は誰も引つかからないであろうトラップを、不憫な目で見下した。明日香が自分が作ったのに。

「カラスが鳴くからさあ帰ろ」明日香は呟き、来た道を辿った。

無意味な無利益な旅は終わりだ。明日香は明日から、また目的ばかりの毎日を過ごすことにうんざりとした。将来のために勉強。高校に入るために勉強。最後の反発として中学生活初めて、学校帰りにコンビニに寄ることにした。

寒いし、そうだ。あんまん。あんまんとお茶でも買おう。

コンビニに入るとカサカサした暖房が頬を掠めた。ホットドリンクコーナーに20歳くらいの男女が話していて、とてもジャマだったので、ホットは諦めて冷たいお茶とあんまんを買った。

お金を出すとき、両手に切り傷がいつぱいついていてことに気がついた。カマイタチ！と明日香は思ったが、実際は先程葉っぱでトラップをこしらえた時に切った傷だった。

明日香は買ったばかりのあんまんとほっぺに当てながら、家に帰った。

CAUSE (後書き)

読んでくださってありがとうございます。
次回完結です。

感想、ご指摘、ご意見、宜しかったらお願い致します。

E F F E C T

効果？

大樹はそそくさと職場から出る。今の時期不況で長く働きたいのに仕事を早く終わらされてしまう。定時で帰るのにみんなは抵抗があるのか、もたもたと着替えなかなか出ようとしないが、大樹はすばやく着替えて、職場の門からでた。別に予定があるわけではない。ただいつまでも更衣室に残り、ウダウダと上司の愚痴を言ったり、不況の世界へ文句を言うのはあまり意味のないことだと思っただけ。大樹はマフラーを首に巻いた。服の隙間から入る風を出来るだけ最小限に抑えたかった。

駅まで歩くのは節約のため。しかしこつも寒いと決心が揺らぎ、バスに乗ってしまいそうだ。大樹はバス停を見ないように俯き、早足で歩いた。

そして100円を拾った。大樹は植木の土にお行儀よく座っている100円玉を手にとった。

「ラッキー」
たったの100円だが、拾うと価値が違ってくるようだ。さっと周りを見回し、コートのポケットに入れた。

大樹は100円を拾って、少なからず気が大きくなっていった。いつもなら節約節約と絶対にコンビニなどには寄らないが、この日は違った。

「寒いし、肉まんも温かいコーヒーでも買おう」
と帰り道にある、入ったことは数えるほどしかないコンビニに立ち寄った。

大樹がホットドリンクコーナーでコーヒーの値段に今更気がつき、

肉まんを諦めるか、コーヒーを諦めるか迷っていると後ろから声を掛けられた。

「大樹先輩、ですよ。お久しぶりです」

見ると高校時代バレー部の後輩だった。随分垢抜けて、大人っぽくなっているがすぐに分かった。

大樹は運命の出会いかもしれないと、感じてしまったのだった。

効果？

昌子が目を離れた僅かな隙に、三歳の息子がいなくなってしまう。団地の中の小さい公園で、昌子がベンチに座って、母親にケータイのメールで近状を教えている僅かな隙に。

(健人！ どこにいるの！！)

公園の中はあらたか探した。遊具の裏も、ベンチの下も、木の上だつて必死に探した。しかし見つからない。昌子は自分の身体の中の血が、随分冷たくなっているのが分かった。貧血で倒れそうだった。目を凝らし、辺りを見回す。しかしどこにもいない。

昌子は震える身体を必死で押さえながら、走った。きつと一人で家に帰ったんだ。きつとそうだ。と昌子は自分に言い聞かせた。

しかし家の前にもいなかった。鍵が無いから、健人は自分で家に入れない。なら、どこへ？

泣き崩れそうになる自分を昌子は叱咤した。ダメよ。私がしつかりしなくちゃ。今は探さなきゃ。

また公園へ戻り、団地の中も探してみることにした。途中、同じ団地に住む老年の女性に声を掛けられたが、助けを求めているのか分からず、曖昧に挨拶してしまった。

団地の汚そうであまり入ったことのない草むら。昌子はスカートや靴が汚れるのを気にせず、草を分け入る。「健人どこ？」無駄だと知りながら声を振り絞るように吐く。

昌子は何かに躓き、顔から草むらに突っ込んだ。とっさのことで

手で庇う事が出来ず、鼻をしたたかに打った。痛いのと、息子が見つかからないのと、惨めさで、昌子は声を上げて泣いた。

「うーうー」

声が聞こえて顔を上げると、目の前に健人がしゃがんでいた。団地の一階の人のベランダと地面の隙間に隠れていたらしい。

「健人ー」

昌子は我が子を掻き抱いた。健人はきよとんとした顔で、昌子を見つめた。

効果？

「近所に芸術家がいるとは思わなかったわー」

明日香は友達に誘われ美術館に来ていた。何人かの芸術家を集めて展示された絵画のなかに、実家のすぐ近くに住む画家が描いた絵が数点あった。

「この絵を描いた人、耳が聞こえないんですって」

「えー、そうなの。だからこんな絵が描けるのかしら」

お互い、主婦の貫禄がどっしりついたオバサン同士、明日香は友人と気兼ねなく喋りながら美術館を周った。

青い絵の具の濃淡だけで描かれた海辺、てんでバラバラな方向に向いた向日葵、目が異様に大きな猫がじっとこちらを向く、確かに画家、伊達健人が描く絵は少し他の絵と違った。印象的な絵のように、しかし写実的にリアルでもあった。

明日香がその中でも特に惹かれたのは、大きな靴の裏の絵だった。靴裏のでこぼこに挟まっている小石までリアルに描いてある。靴の向こうには信号機やその上には雲まである。見ている方は踏まれているような感覚になる。絵の題名には「落し物」とあった。

「落し物……ねえ」

明日香の溜め息まじりの言葉に友達が耳ざとく

「あんだ、また変なこと考えたんじゃないでしょうね」

と面白そうに聞いてくる。

「嫌ねえ、ちよつとは耳遠くなりなさいよ」

明日香はそう友達の言葉をいなした。

明日香は友達と別れ、家に帰る道を歩いていた。思いついて、と言つより美術館にいたときから考えていたことだが、名前のないハンカチを落としたら、そのハンカチはどこに行くのだろうと考えた。誰かに拾われて、例えばここで落としたら交番に持っていったもらえる？ それとも捨てられてしまふのだろうか。それともあの絵のように、踏まれてしまふのか。

さて、ここにありますは名前の無いオバサンのハンカチでございます。

明日香は鞆からレースのついた淡いピンクのハンカチを取り出した。ハンカチの四隅の一つに可憐な妖精の刺繍がしてある。お気に入りのハンカチ。風にひらひらとハンカチを馴染ませ、お前はこれから旅に出るのよ。と心の中で言い聞かせる。

「さあ！ 行け！！」

明日香は空にハンカチを投げた。風が吹いて、ハンカチはひらひらと目の前を泳いでいってしまった。

道路を挟んで、向こう側に着地したハンカチを、スーツ姿の髪の毛薄い男性が拾った。

「何やってんだ」

あきれたように、男は言った。そしてハンカチを見て、

「これ、俺が買ってやった奴じゃないか！！」

と怒ったように嘆いた。

「運命だわね」

明日香は軽く溜め息をつき、向こうに突っ立っている夫に大きく手を振った。

夫が一昨年の明日香の誕生日に買ってくれたハンカチ。明日香は年甲斐もない妖精の刺繍にあきれて、一年間は箆笥にしまったまま

だった。しかし本当は、初めて夫から貰ったプレゼントをもつた
なくて使えなかっただけだ。

友達と今日市役所に取りに行った離婚届。結局出さないことにな
りそうだ。明日香は心の中でその友達に「裏切つてごめん」と謝つ
た。

明日香は、いつから目的の無い主婦業が嫌になっていたのだろう。
と思った。学生の頃はそれこそ、意味の無い「目的探しの旅」を度
々強行していたのに。毎日将来のためにと目的ばかりの生活があれ
ほど嫌だったのに。

夫のことは全然嫌いではない。だから明日香は離婚届けだって、
悩んでいる友達に付き合つてあげただけだ。だけど今、明日香は、
離婚出来ない運命だと確信してしまった。小さい頃サンタクロース
を素直に信じたときのよう。さすがに今ではサンタクロースの正
体を知っているが。

しょうがないかー。運命だったんだもんねー。

明日香はどうして夫がこちら側に渡つてこないんだと、疑問に思っ
た。しかし思い直した。夫側の歩道に私の家がある。効率を考えた
ら私が夫の方に渡るのが理に適っている。

「こつち、渡つてきなよー」

「なんでだよ。渡り直すことになるんだから、意味無いじゃないか」
明日香と夫は大声で車道を挟んで言い合いをした。それを横目で見
たバイクに乗った男は、面白そうに二人を見ていたが、二人はその
ことには気がつかなかった。

EFFECT（後書き）

effectって大文字で書くと、バランス悪いですね。びっくりしました。

読んでくださってありがとうございます。

元にした芸術家や作品はありません。

だからそんな技法や芸風は存在しないと思います。

感想、ご意見、ご指摘、宜しかったらお願いします。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4112r/>

意味のないことを

2011年3月9日08時43分発行